

地域アーカイブ構築を通じた協調学習コミュニティの形成

立命館大学政策科学部 稲葉光行

inabam@sps.ritsumei.ac.jp

キーワード：正統的周辺参加，協調学習，CSCL，総合的学習

1. はじめに

本研究では、ある地域に住む子どもと大人が、地域の文化や歴史、まちづくりなどについて語り合い、共に学び合うことで、地域社会の再生産を目指すという社会的実践の場（協調学習コミュニティ）の実現に取り組んでいる。我々はまず、このような活動のインフラとして、インターネット上での協調型アーカイブ作成システム「耕蓄」を開発した。また、2つの小学校の「総合的な学習の時間」での活動を中心として、耕蓄を用いた地域アーカイブ作成と協調学習コミュニティの実現に取り組んでいる。さらに、自治体や教育機関と協力し、地域に関する多様な情報を収集・整理・保存する過程を通じて、子どもと大人が、まちづくりや学校改革といった政策形成のプロセスに参加していくための基盤と方法論の確立に取り組んでいる。以下に、本研究の背景と現在の取り組みについて報告する。

2. 研究の背景

現在、情報技術を用いることで、教師から生徒への知識伝達（教育）を効率化する取り組みが数多く行われている。本研究では、このような一方向的な「教育」ではなく、学ぶ側の主体性や自発性、積極性を重視した「学習」活動の支援を目的としている。さらに、「地域」という社会的文脈における学習過程をより意義のあるものにするために、以下の3つの視点を重視した支援を目指している。

- 1) 学習活動の場を学校に閉じるのではなく、地域社会と直接関わる形での社会的実践を行う機会を提供すること。
- 2) 子どもと大人が、対等な立場で、地域に関する話題についての協調学習に参加できる仕組みを用意すること。
- 3) 学習を、地域共同体を再生産する活動として位置づけることで、学習者の社会的実践の成果を、地域社会全体として活用する場を設定すること。

本研究では、これらの視点から学習活動の支援を行うことで、子どもと大人が対話し学び合いながら、両者が「正統的周辺の参加 Legitimate Peripheral Participation」(Lave and Wenger 1991) の過程に参加できる環境の実現を目指している。

3. プロジェクトの概要

3. 1 地域アーカイブ構築のための協調学習コミュニティ

我々は、子ども同士あるいは子どもと地域住民が、地域の歴史や文化、公共財などを記録・整理・保存する過程を支援する、協調的アーカイブ作成システム「耕蓄」を開発した。耕蓄は、HTMLの知識がない利用者でも、地域に関する写真・動画・説明文などを、階層化された「話題ネットワーク」というコンテンツとしてまとめ、それらをネット上で発信できる仕組みである。また、地域の歴史や伝説を元に自らが作り出した「ナラティブ(narratives)」(Wertsch, 1998)を「紙芝居型コンテンツ」として登録・発信できる仕組みも用意されている。さらに耕蓄では、各々のコンテンツに対する電子掲示板機能が自動的に追加されるため、ネット経由でアクセスする利用者は、地域に関する情報の追加・修正・編集を行うことができる。

耕蓄のこのような仕組みは、筆者らが提唱する「ナレッジブル・アーカイブ Knowledgeable Archives」(稲葉, 平林 2000) のコンセプトに基づいて実装されている。ナレッジブル・アーカイブとは、アーカイブのデザイナーや開発者だけでなく、利用者もコンテンツの拡張作業に参加する仕組みを備えた、新しいデジタルアーカイブの概念である。この仕組みによって、すべての利用者が、アーカイブのデザインと開発・拡張作業を行うコミュニティの一員になる

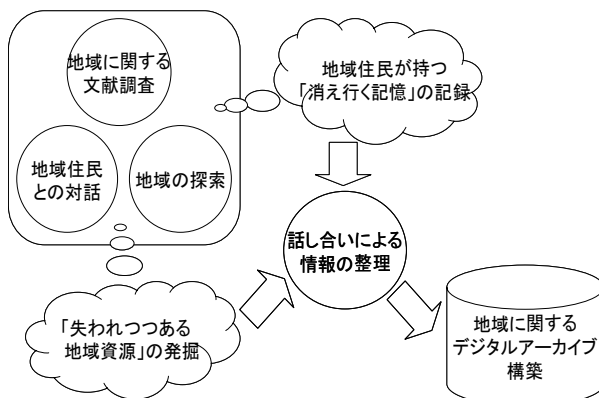


図1：耕蓄による地域アーカイブ作成のプロセス



図2：耕蓄におけるネットワーク型コンテンツの例

ことができる。耕蓄はこのナレッジブル・アーカイブの概念を地域アーカイブ作成の仕組みとして取り入れることで、技術的なスキルに関係なく、地域住民や子どもが、地域アーカイブ作成に参加し、地域に関する情報交換や知識継承を行うコミュニティの一員となることを可能にしている。

我々は現在、舞鶴市立朝来小学校および八幡市立美濃山小学校の協力を得て、総合的な学習の時間において、耕蓄を使った地域アーカイブ作成を行っている。図1は、2002年度の実験での学習過程を示している。この活動の中では、まず子ども達が、地域住民の協力も得ながら、地域に関する情報収集を行った。その後収集したデータを耕蓄に登録した。図2と図3は、これらの活動によって作成されたコンテンツの例である。図4は、地域アーカイブ作成後のネット上での協調学習のイメージである。ここでは、各コンテンツに電子掲示板機能が付属しているため、ネット経由でアクセスする多様な利用者が、子ども達によって収集・整理された素材を元に、地域の文化や歴史について語り合い、互いに教え合うことができる。

3. 2 まちづくりのための協調学習コミュニティ

我々は現在、八幡市および同市教育委員会の協力を得て、情報技術を活用し、自治体の政策形成プロセスに、大人だけでなく子どもにも参加してもらうための「やわた子ども会議」の取り組みを行っている。ここでは、八幡市にある小中高等学校の生徒約40名が参加し、まちづくりや学校改革といった課題について、オフラインおよびオンライン双方での話し合いを行っている。

2004年度は、「駅のバリアフリー化」、「八幡山のごみ問題」、「楽しい公園作り」といった活動テーマを子ども達自身が設定し、調査内容の選定やフィールドワークを行った。フィールドワークでは、デジタルカメラとICレコーダを持った子ども達が、地域のさまざまな場所に赴いて調査を行い、地域住民にインタビューすることで、地域が抱える問題点や課題に関わる具体的なデータ（写真、音声、テキスト情報など）を収集した。これらのデータは、子ども達の手でオンラインプレゼンテーションデータとして整理・編集され、一般市民を対象とした発表も行われた。さらに2004年3月には、八幡市長の臨席のもと、子ども達から市に対して調査結果の報告と政策提言が行われた。

活動終了後のアンケートでは、ほとんどの参加者が「この活動を今後も継続していくべきである」という意見を持っていたことがわかった。またこの活動の補助をしている大学生や教育委員会のスタッフに意見を求めたところ、多くの協力者が、子ども達の自発性・積極性と、大人が思いつかないような多角的な視点から議論や提言が行われていたことについて、予想以上に高いレベルの成果が得られたという印象を持っていたことがわかった。この成果を元に、2005年度は、自分達が通っている学校をどのように改革すべきか、という課題を設定し、前年度と同様に、オフライン・オンライン双方の対話手段を用いて議論を進めている。

このように、自治体や大人の側が、子どもを地域社会の再生産の一翼を担う存在として認識し、さらに対話の手段として情報技術を活用することが、地域社会全体にとって意味のある「正統的周辺の参加」を実現するための一つの鍵となると考えられる。

4. まとめ

本稿では、「耕蓄」による地域アーカイブ構築を通じた子どもと地域住民の協調学習の取り組みについて紹介した。また、地域の大人だけでなく、子ども達の視点からのまちづくりのための協調学習コミュニティを形成する取り組みとして、「やわた子ども会議」での活動を紹介した。

今後は、舞鶴市および八幡市での活動成果を元に、地域の子どもの大人が「新参者」と「古参者」の役割を動的に変化させながら対話することで、地域社会全体が再生産される過程を支援するための、多様な情報インフラの整備と方法論の構築に取り組んでいきたい。



図3：耕蓄における紙芝居型コンテンツの例

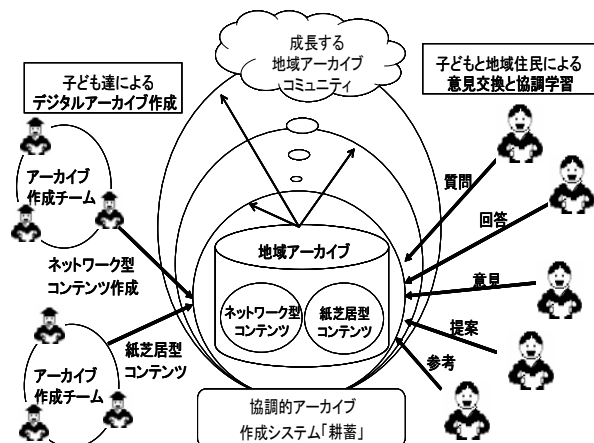


図4：耕蓄による協調学習の概念図